Blue eyes

浅月健

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

【Ｎコード】
Ｎ０６３５Ａ

【作者名】
浅月健

【あらすじ】
コナンは今平凡な学校生活を送っている。その裏腹でコナンの体は副作用に犯されている。だがそんな時、キッドの予告状が届いていて・・・・・・・・

「ありがとう！灰原！

「ちょっと工藤君大丈夫？」
「何だ灰原、真剣な顔して」
今学校は下校中で、さっき少年探偵団の元太、光彦、歩美と別れたところだ。
そういうゆうことで今コナンと灰原は一緒に歩いている。
「最近、ボーッとしてたり、授業中居眠りしてるしそれに顔色も悪くなってるじゃない・・」
「あぁ～今なちょっと新しい小説の新刊が出ててさぁ～それ読んでて徹夜してたりするからなぁ～顔色が悪いのはそのせいだろう。うん。」
「あなた分かってる？」
「うっわかってるよ・・・・・・」
コナンはアポトキシンの副作用で、発作や吐血などがおこる。発作といっても、毎日起こるわけでもなく何の予知もなく起こるので小さかったり大きかったりその症状がさまざまだ。
コナンの場合、哀と違ってアポトキシンの解毒剤を何回もふくようしたのでその副作用が今になってきたのだ。
「とにかく無茶は禁物ねあなたの体は今何があってもおかしくない状態だから」
「わぁーってるよ。風邪も引かないように用心してるし、あっじゃぁなついたぜ」
「えぇ。また明日。定期健診だからちゃんと来るのよ」
「はいはい。お前も女なんだからきをつけて帰れよ！」
「大きなお世話だわ」
「お前って本当にかわいくねぇ～なぁ～。せっかく心配してやってんのに・・・・。」
「だからおおきなおせわだっていってるの」

「まぁいい。じゃぁな」
「ええ」
＊＊毛利探偵事務所＊＊
「コナンくーん」
「なぁ～に蘭姉ちゃーん」
「服部君から電話よ」
「うん。分かったすぐ行く」
（ったく何だよ服部のヤツ）
コナンは蘭がいなくなったのを確認して電話に出た。
「何だよ服部・・」
『何やつれへんな工藤』
「何だと服部」
『あぁ～工藤冗談、じょうだん』
「まぁいい何のようだ服部」
『何や見てへんのかテレビ』
「あんあぁ～キッドのことか」
『そや』
そう明後日はキッドの予告日なのだ。本当はコナンは現場に行きたいのだが哀がそれを許さないだろう。あのお得意の目で威圧してあろう・・・・
「それがどうかしたか」
『何やいかへんのか？』
「うるせぇなぁ～俺は殺人専門なの泥棒専門じゃない。」
『まぁそういわへんで工藤いこうや』
服部はコナンの体のことを知らないのだ。なぜか予告上が、工藤邸にも届いていた白い封筒つきで・・・・・・・・・・・・まぁ誰かのいたずらかと思うが・・・・。
「まぁとにかく俺は行きませんじゃぁな」

『あっまて工藤前は面白そうにキッドの現場いっとたやないかい工藤、工藤！』

俺はそんな服部を無視して電話を一方的に切ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊次の日＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「じゃぁ博士の家行ってくるね蘭姉ちゃん」

「あ！コナン君博士に迷惑かけちゃだめよコナン君」

「うん！分かったいってきまぁ〜す」

「いってらっしゃーい」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊阿笠邸の地下室＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はい終わりよ」

「サンキュー灰原」

無事定期健診を終えたコナンは服をととえながらお礼を言った。

「どういたしまして」

「そういえば工藤君」

「何だ灰原。」

「あなたの本当の家に、白い封筒でキッドの予告状がはいっていたらしいわね。」

「あぁそうだけど。あれはなんだったんだろうか」

「解けたの？暗号」

哀は、器具をきれいにきちんとしまいながら聞いた。

「あぁとけたぞ」

「それで行くの？」

「行ったらいったで俺の体が持つか持たないか分からないだろう。そこで倒れたらどうするつもりだ？」

「あら分かってるじゃない。でもこの定期健診良好だったから行ってもいいわよ。」

「えっ？」
コナンは驚いたまさか哀から言い出してくるとは思わなかったからだ。
「あら。素直に喜びなさい。私から行っていいっていってあげてるんだから。」
「ありがとう灰原！」
いきなりコナンが灰原に抱きついてきたので灰原も吃驚した。だがすぐにコナンを突き放し、
「だけど今日はあなたが睡眠をとってなかった分休んでもらうわよ。」
「ああ分かった」
「それじゃぁ横になって、寝てなさい。あと腕だして」
「あぁ」
そういうと哀はコナンに注射をした。するとコナンにすぐ睡魔が襲ってきた。
「は・・いばらお・・まえ・なにを」
「即効性の睡眠薬を投与させてもらったわこれですぐ眠れるでしょう」
そういって聞いているか分からないが、コナンは夢の世界に入っていった。
「よく眠りなさい工藤君・・・」
哀はそうやって言い聞かせ地下室を後にした。

（ピーンポーン）

誰かしらと考えながら哀は阿笠邸の玄関にいった

「よう！姉ちゃん元気やったか？」
服部平次だ
いきなりでてきていきなりさっさとあがりこんでいた。
「あら西の探偵が何のよう？」
「まぁええやん工藤はおるかいな」
「寝てるわ」
「んじゃおきるまでおるわ」
「先に私に話してくれる？ココに来た理由」
（ギロッ）
でた。灰原の怖い目攻撃・・・・・
「あぁわかっとるで姉ちゃんそんな怖い顔スンナや」
「とにかく話して頂戴」
「あしたなぁキッドの予告日やろ？そやからなぁ昨日一緒に行こう
ってさそったらないかへんゆうからむりやりいかそうとしたんや。」
「あら工藤君いくっていってたわよ？」
「なんやて？」
「気が変わったんじゃない？」
「ならむりやりいかすこともあらへんなぁ」
「せや工藤どこで寝とるん？」
「地下室よ。起こさないほうがいいと思うわよ」
「そうしとくはあいつは低血圧やからな無理やり起こしたらなにさ
れるか」
「工藤君の蹴りがとんでくるかもね。」
「ハハハ。まぁええわ明日が楽しみやわ～」

「ありがとう！灰原！（後書き）

どうも皆さんこんにちは！このたび小説を見ていただきありがとうございます！

え～

出演者

コナン・哀・平次・蘭

語り　浅月健

でしたぁ～

これからもよろしくおねがいします！

「それでは名探偵私はこれで。また近いうちに会いましょう」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊ＫＩＤ予告日＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おぉ～ええ天気やな工藤！」

「そうだな。服部」

「んで行くやろ？ＫＩＤの下見に」

今日はＫＩＤの予告日だだから服部とコナンの二人で蘭に了承してもらって下見に行くのだ

「あぁ～米花国際美術館にな」

「米花町にもそんなビッグジュエルやるんやな」

「あー俺もびっくりしたよ」

「まぁ～ええ行こか」

「あぁ」

「警察やら何やらきとんやろ？」

「あぁ～中森警部やら白馬探偵とかいうやつがはりきってるようだぞ」

「中森はんはたしかＫＩＤの予告日になるとえろーはりきっとるやつやろ、なら白馬っちゅうのは探偵はどうゆうやつだ？」

「あぁ～白馬ってのはＫＩＤの専属探偵らしい。だから殺人とかそうゆううのは専門じゃないやつだ」

「へぇ～そうなんや」

そんな話をしていてようやく現場につきあるていど下見えおし、その他一緒にいた中森警部達に挨拶をし、なんとなく仲良くなってはなしをしていた。
どうやら中森警部は部外者の俺たちに腹立てているように見えた。
しかし白馬や服部はそのてん仲良くなっているようだ。
「何や白馬外国いっとったんかなんでかえってきたん？」
「それはもちろんＫＩＤですよ。今度こそ逮捕してやろうとおもってね。それよりこの子供はなんです？」
「あぁ～このボウズか毛利のおっちゃんにこもりたのまれてなぁ～」
「毛利さんに？そうですかガンバッテくださいね」
「そや！今からいろいろ終わったことだし何か食べに行こか？」
「いいですねぇ～いきましょうか」
そこからなかよくなった白馬と一緒に食事に行きそれからいろいろ話をしてＫＩＤの予告時間１０分前になった

「それじゃぼくはこれで」
「あぁそれじゃ」

「っとゆうことで俺もこれで」
白馬がいなくなったところで、コナンが言った
「なんや工藤一緒に行かんのか」
「あったりまえだろ俺には俺のやり方があるじゃぁな」

「おっおい工藤！工藤！」
コナンは服部と別れたのだった・・・・・・

怪盗ＫＩＤ予告時刻・・・・・・

「レディーツアンドジェントルマン」
「出たぞ～ＫＩＤだ～おえ～」
威勢のいいＫＩＤの声と中森の声で始まった

（まったくよくだまされるよな中森警部も白馬もこれじゃいつまでたってもＫＩＤを捕まえられないぜまったく）
あわただしく警察たちが動く中一人だけ動かなかった警察官がいた
（あれがＫＩＤだな）
よく見ると服部の気配がないまさかダミーにだまされたのかと思うコナンである。実はそのとうりそのころ服部は空中にひらひら飛んでいるＫＩＤのダミーだまされている。
そんなことを思っているとき。その警察官が動いた。
（よし。動いた）
それからＫＩＤはそのビッグジュエルを見事盗み出し、屋上に行ったもちろんコナンも一緒だ。

「おやおや名探偵ストーカーとはまた悪趣味ですねぇ」
（ッチやっぱりきずいていたか）
「うるさいなＫＩＤ今度こそつかまってもらうぜ」
「そうわいきませんね名探偵そんなことをしたら、私のファン達がだまってませんよ」
「っるせぇ～んなの知るか、とにかくつかまってもらうぜ」
「そうはいきはせんね名探偵」
「なら眠ってもらおうか」
コナンはそういいながら麻酔銃をとりだしたそれと同時にＫＩＤもトランプ銃を取り出した。
するとその瞬間ＫＩＤがそれを打ち出した。
コナンはそんなことどうでもいいというばかりに華麗に交わしていった。コナンは反撃とばかりにサッカーボールをけったＫＩＤはすこし驚いたがすぐ華麗によけた。コナンはその一瞬のすきに麻酔銃をうった。
ＫＩＤはそれもなんとかよけた。

ーーードクンッ－－－－

するとコナンの体に異変がおこった。いつもの発作だ。
その異変はＫＩＤにもわかった
「どうかしましたか名探偵」
「なんでもないさ」
コナンは普通に平常心で話していた。
（ッチ発作かだがまだ持つたのむもうちょっとだけもってくれこい

つにはみられたくない）
「だけど顔色がよくないが」
「なんでもないと言っているだろうお前その宝石早く返せ」
「あぁそうでしたねでわ少しお待ちください。」
そういうとＫＩＤは宝石を月にかざした。
するとＫＩＤはため息をついた
「またちがうか」
「なんのことでしょうか？」
「とぼけるな追ってんだろう？パンドラってゆうやつを」
「なんで知っておられるのですか名探偵」
「企業秘密だ。ほらそういってないで早く返せ違うんだろう？」
「これは失礼しました名探偵」
ＫＩＤは宝石をハンカチにくるむとコナンに投げた
それをコナンがつかむ
「おい。宝石を投げるなよな」
「別にいいでしょう名探偵？」
「一つ聞く。俺のいや工藤新一の家に予告状を送ったのはお前か？」
「えぇそうです。久々の再開ですから送りいたしました」
「まぁいいそろそろ帰らないとつかまるぞお前」
「貴方が捕まえないのですか？」
「別にいいだろう気が変わったんだ」
「そうですか」
「なにボーッとしてやがる早く行かないと俺の気が変わって捕まえるぞ」
「それはできれば避けたいことですので、ここは退散いたしはしょう」
「さっさと行け！バ怪盗」
「それでは名探偵私はこれで。また近いうちに会いましょう」
そうゆうとＫＩＤはハングライダーで逃げていった

「ゴホッゴホッハァ・・・・」
実はもうたっているのをままならないくらいだったそこでコナンは灰原に連絡した。
『工藤君どうしたの？』
「灰原か・・・・わりぃ迎えに・・来て・・・くれ」
『わかったは今何処にいるの？』
「米花国際美術館の屋上だ」
『わかったはすぐ行く』
（ピッ）
電話が切れた
「頼む早く来てくれ灰原・・・・」

5分後・・・・・・・・・・・・・・
「工藤君！」
「灰原・・・・・・」
「大丈夫？だから無理するなって言ったのに・・・・」
「わりぃ　ゴホッ」
「工藤君もうしゃべらなくていいわ寝てなさい・・・・」
「あ・・ぁ」
コナンは夢の世界に入っていった」

「哀君・・・新一は・・・・・」
博士と二人でコナンを博士の車に乗せ今、阿笠邸につき、コナンはベットで寝ていた。
服部には哀から帰ったと伝えた。今ＫＩＤの現場は警官達でにぎわ

っているだろう。
「大丈夫よ博士。いつもの発作だから・・・・・」
「どうして・・・・・」
「多分無理な運動よ」
「新一・・・・・・・」
コナンは酸素マスクと点滴をしながら眠っていた。

「それでは名探偵私はこれで。また近いうちに会いましょう」（後書き）

どうも皆さん浅月健でございます。今回もこの小説をごらんいただきまことにありがとうございます。
それでわ
語り・浅月健
出演者・江戸川コナン・灰原哀・怪盗ＫＩＤ・服部平次・中森警部・白馬探・
でしたこれからもヨロシクお願いします。

「黒羽快斗ヨロシクね新一」

その日コナンはベットに横になり、点滴とにらめっこをしていた。
「はぁ。灰原これ何時とれるんだ？」
「あら？起きてたの？」
「質問に答えろ」
「そうね、貴方が元の体調にもどってからよ」
「もうなおってっ・・・・・・」
コナンは勢いよく起き上がったので本調子じゃなかった体の力が抜けてベットに落ちた
「ほら。まだ本調子じゃないじゃない。」
「くそっ」
「クスッ」
「笑うなよ！」
「あら。ごめんなさい」
「うぅ～。まぁいい、灰原・・・・」
「何よ？」

「あの解毒剤まだのっこてるだろ？」

あの解毒剤とは灰原が慎重に慎重にして半年もかけてつくったアポトキシンの解毒剤だった
それを3週間前、コナンに早速渡そうとしたが、コナンがそこで発作を起こして倒れた。
そこで灰原はもうコナンには副作用やらなにやらがあることをしったのだ。

「のこってるわよ。」
「なぁ～灰原やっぱり解毒剤のんだらだめか？」
（ヤッパリ）
そう灰原は思った
「だめよ。今の貴方が、解毒剤を飲んだら自殺行為にしかならないわ」
「そこを何とかたのむ灰原！」
そういってコナンは手と手を合わせお願いポーズをした。

「あら。私は貴方を殺すために薬を作ってきたんじゃないわ」
「そこを何とか・・・・・・・・・・・・」
「だめよ」
そういって灰原は阿笠邸の階段を下りていった
「あっ灰原！・・・・・・・・・はぁ～やっぱだめか。でも一度だけでもいいからまた新一の体になってあいつに会いたいんだよな。」
（蘭にあって話したいんだよな）

「よし。こうなったらあれをするしかないか・・・・・・」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝夜＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
哀たちが寝しずまったのを確認してコナンはそっとベットを抜け出して、まだゆうことをきかない、体を一生懸命ひきずって哀がいつも使っている地下室にいった。
（カチャ）
コナンは地下室（研究室）に入ると何かを探し始めた。

「なにやってるの工藤君？」

その声にコナンはドキッとした灰原哀だ。だがすぐ平静をとりもどした

「ヤッパリ探してたのね？」
「何をだ？」
「とぼけないで。アポトキシンの解毒剤をさがしてたんでしょ？」
「だったらなんだってんだ」
「そこにはないわ。私の手の中にある」

そういって哀はポケットから小さなビンを取り出した。
そのビンの中には、解毒剤と思われるものが入っていた。

「そんなにほしいならあげてもいいわよ」
「何？」
「どうせ貴方。今の私を麻酔銃で撃って、とるつもりでしょう？」
「チッばれたか」
「で？死ぬかもしれないけど試してみるの？試さないの？」
「それで本当の姿を取り戻せるならのむぜ」
「それじゃ今の貴方の体を、完璧にしてから飲むことね」
「そうするよ」
「そうだ。言い忘れてたけど。」

「何だ？」
「今貴方が本当の姿に戻ったら、組織が目をつけるかもよ？」
「それでもいい」
「蘭さんが巻き込まれても？」
「守ってやるさ。どんなときでも。」
「たいした自身ね。どうでもいいけど早く寝なさい。」
「あ・・ぁ」

（ドサッ）

コナンはその場で倒れた。

「工藤君！？」

哀はすばやく、脈をとり呼吸を確認した。
どうやら気が抜けて寝ているようだ。
「そうとう疲れたようね。それとも気が抜けたのかしら？工藤君」
哀はそうゆうとコナンを二階に運んで寝かした。

三日後。

すっかり体もよくなったコナンは解毒剤を飲む了承を得て、別れをいいに蘭のいる、毛利探偵事務所に向かった。

毛利探偵事務所。

「コナン君お帰り！」
「ただいま蘭姉ちゃん」
「ボウズ今日はやけに遅かったじゃないか」

「あのね。蘭姉ちゃん、おじさん。話があるんだけどいいかな？」
「何？コナン君？」
「あのね僕明日からお母さんとお父さんのところで住むことになったんだ」
「なんだと！」
「ウンとね。空港まで阿笠博士がおくってくれてね。行くんだ」
「学校は？コナン君？」
「うんとね。今日でお別れなんだ。お父さんが届けだしてくれるんだって。」
「そう・・・・・。寂しくなるわ」
「ごめんね蘭姉ちゃん」

「誤ることなんてないじゃない。お父さんたちとまた暮らせるんだから」
「うん！」
「それじゃ今日はコナン君のお別れ会として腕振るっちゃうぞ！」
「ヤッター」
「コナン君。その前にお風呂入っといてね。」
「うん。」
（ゴメンな蘭。嘘ついちまって・・・・・）

次の日

「じゃーねコナン君元気でね。」
「うん。蘭姉ちゃんもね。」
「ほら。お父さんも！」
「あっあぁじゃあーなコナン。元気にしてろよ。」
「うん！。」
「コナン君行くぞ！」
「うん。博士今行く！」
「じゃーね。コナン君 」
「ばいばーい」
「元気でな～」

（じゃーな蘭）

阿笠邸　地下室

「それじゃぁ行くわよ」
「あぁ」
「死んでもしらないから」
「大丈夫だよまだしなない」
「幸運を祈るは」
「はい。」
渡された薬をコナンは口に含んだするとたちまちコナンのまわりには煙が立ち込めた。

「さよなら。江戸川コナン君」

（シュ～シュ～）
煙の中から出てきたのはまぎれもなく『工藤新一』だった。だが様子が少し違った。

「はぁはぁっはぁ」
「工藤君？！」
「はぁゴホッ」
「工藤君大丈夫？博士早く来て！」
「その呼びかけに博士が飛んできた」
「哀君！」
「大丈夫よ。」
そうゆうと哀はすばやく新一の体に点滴の針や酸素マスクやらをてきぱきつけていった。
「博士。ベットに運んで」
「わかったぞい」
そうゆうと阿笠博士は大事そうに新一を抱え一階のベットへ運んでいった。

３０分後

「何とかとうげはこえたわ」
「そうか・・・・・」

次の日

「うっ」
新一は目を覚ました
一番最初に移ったのはずっと看病していて疲れたのだろう。哀が寝ていた。

「おぉ～新一起きたか！」
そういったのは阿笠博士だった。

（俺戻ったの・・・か？）
とおもった。
そして完全に覚醒して。
新一は飛び起きた。
「これ新一！いきなりおきたらだめじゃぞ」
博士に強引にベットに引き戻された

「工藤君。起きたの」
「哀君。おこしてしまったかい？」
「ちがうは。今起きたのよ。」

「灰原・・・・」
「何？工藤君」
「ありがとな」
「貴方に一個かりよ」
「お返し何がいい？」
「そうねフサエ・ブランドのバックとか財布とかかしら」
「おいっ」

「哀君」
「何？博士」
「今日、科学者達の集まりがあってな。それにどうしても出席しな

きゃいけなくなってのぉ～」
「あら博士も？私も今から少年探偵団とあつまりがあるの」
「いってこいよ二人とも」
「でものぉー新一。今の新一おいていくのものぉー」
「大丈夫だよ寝るだけだし」
「私は行かないわよ。」
「おい灰原」
「貴方を今一人でおいておくなんて」
「大丈夫だって」
「でも。」
「言ってこいって。」
「わかったは」
「哀君！」
「でも携帯に。2時間おきに電話するから。でなかったらすぐかえってくるから。」
「あぁわかったよ」
「新一・・」
「ほら博士も早くしたくしろよ」

最後まで心配していた、博士をようやく追い出して。新一は阿笠邸の中で一人になった。

（ピーンポーン）

数時間後、玄関からチャイムを鳴らす音が聞こえた。

（誰だよ）
っと思いながら新一は、玄関に行ってドアを開けた。
だがそこには、見知らぬ高2ぐらいの男が立っていた。

「どちらさまですか？」
新一はその客にそういった。
「やだなぁ～新一もう忘れちゃったの？」
「だから誰だ？」
「こういえばわかるかな？」
（コホンッ）
と咳払いをし、新一に言った。

「こういえばお分かりですか？名探偵？」
その口調はどこかで聞いたときがあった。
そういって新一はびっくりして、
「キッ　　！」
『キッド』といおうとしたとき、キッドに口を塞がれた。
「俺も有名人なんだから、大声でキッドって言わないでよ！」
そういったとたん新一がキッドの頬をつねった。
「イタタッ何するのさ！新一なにするのさ」
「それは変装か？」
「違うよ地顔だよ」
「それじゃぁ今から警察に・・・・・」
「あぁ～新一ストップストップ！」
ＫＩＤに電話をとられた新一はいきなり怒り出した
「何しに来たんだ！」
「その前に自己紹介！」
「はぁ？」
「江古田高校２年、１７才。黒羽快斗ヨロシクね新一」
「よろしくじゃねぇよ何でいるんだよ！」
「いったじゃん。『それでは名探偵私はこれで。また近いうちに会いましょう』って」
「おい！だからって・・・・・・」

（ドクンッ）
「くっ」
「どうしたの新一？」
新一は発作でその場に倒れた。
「おい！新一！新一！新一」
（ピリリリリー）
そのとき新一の持っていた携帯の着信音がなった。
快斗はその携帯をとった

「もしもし？」
『誰かしら？』
「えぇ～とまぁそんなことはほっといて、新一倒れちゃったんだけど・・・・・」
『なんですって？すぐいくわ』
（ぶちっ）
「えっちょっとえぇ～・・・・・・えっとベットに運んであげないと・・・・・」
「はぁはぁきやすくさわるんじゃはぁねぇ～よ」
「はいはい。ごめんなさいねぇ～」

そういいながら、快斗は新一の体をベットにおいた。

１０分後

「工藤君！」
「えっと灰原さん？」
「えぇそうよ」
「工藤君は？」

「ここ」
快斗はすばやく新一のいるベットをさした。
すると哀がすばやくベットにきた。
「ちょっと手伝ってくれる？ＫＩＤさん？」
「何で私の名を？」
「工藤君が逃げないように、盗聴器つけてたのよ」
「そうですか。」
「はやく手伝って！」
「おおせのとうりに姫」

快斗がいてくれたおかげですばやく対応ができ、治療もすぐおわった。

「ありがとう。助かったわ」
「どういたしまして。哀ちゃん」
「気安く呼ばないでくれる？」
「なんだよ～哀ちゃんこれからお隣さんになるんだよぉ～？」
「あら誰がそんなこと許可したかしら？」
「どうせ新一一人だと、栄養失調にもなりかねないよ」
「私が何とかするは」
「うぅ～。」
「そんなにいたいならいさせてあげていいわよ」
「えぇ～いいの？」
「ちょうど人手が足りないところでね」
「ちょっと哀ちゃんおれって哀ちゃんの何？」
「何でも屋よ」
「ひどいよぉ～」

「で！哀ちゃんかんじんな所聞いてないんだけど！」
「何かしら？」
「とぼけないでよぉ～」
「なにをとぼければいいのかしら？」
「教えてよ。新一が倒れた理由」
「本人から聞けば？」
「ほら。おれこれから工藤低に住むんだからそういうのしっとかないとさぁ～」
「何回言わせるの？自分で本人にきけばいいじゃない」
「うぅ～もういい！自分で考えるもん！」
哀はその様子を見て、「幼稚園児ね」と思ったのは、ココだけのはなし・・・・・・・

１０分後
哀がもうそろそろ帰ったかしらと思いリビングに戻ったとき哀はあきれたのだった。
「まだいたの？貴方」
「哀ちゃんが教えてくれるまでいるよ」
「うざいから消えてくれる？」
「哀ちゃん！それはないよ～」
「うっとしいわね。教えてあげるわよそんなにそんなに教えてほしいなら」
「えぇ～本当？哀ちゃんやったー！」
「あんまりはしゃぐと教えないわよ。」
「ごめんなさいごめんなさい。続けてください」
それから哀は新一の体のことなどを教えた。

「それ本当なの？哀ちゃん」
「本当よ」

「それじゃもし一歩間違えたら、新一にもうあえなかったってこと？」
「そういうことね」
「まじかよ・・・・・・・・」
「あら。そんなに落ち込むことじゃないと思うわよ。げんに今生きてることだし。しょぼくれてないで、明日のこと少しは考えてくれる？私も博士も明日はでかけるの」
「はい。みっちり看病させていたきます」
快斗はそういいながら、灰原にむかってけいれいをした。
「よろしくたのむわよ」
「はい！哀様」
「あら。工藤君が起きたみたいよ」
「えっ本当？」

「んっ」
「新一起きた？」
「誰だ？」
「何さ今あったばっかじゃん」
「あぁ！ＫＩＤ！」
「やだな～新一君今はＫＩＤじゃなくて快斗だよ！」
「快斗？」
「うんそう黒羽快斗」
「で？なんでそんなヤツがここにいるんだ？」
「ん？明日から新一の家に居候させてもらうんだよ」
「はぁ？そんなのおれが許可してないぞ」
「哀ちゃんが許可してくれたよ。ねっ？哀ちゃん」
「ええ許可したわよ。後工藤君、貴方の体のことも教えといたから」
「えっそんな勝手に」

「別にいいじゃない。これからいろいろお世話になるんだし。もしものときのためよ」
「忘れろ黒羽～体のことは忘れろ～いますぐに」
「何を無茶をいってくるのさ。新一もう聞いちゃったよ」
「あぁ～最悪！寝る」
ガバッ
そういって新一は布団を頭までかぶり寝だした。

そうしてはらはらドキドキの快斗と新一の生活は始まったのだった。

「黒羽快斗ヨロシクね新一」（後書き）

えぇ～第三話読んでくれてありがとう！
さて快斗登場！
なんとまだ少年探偵団がでていない！
これはいけない・・・・・・・・・・・・
何時しかでてきます！
さてこれからがハラハラドキドキですよぉ～
次話もよろしくおねがいいたしますでぞんじます。

あいつほんとに怪盗ＫＩＤ　か？

「それじゃ。いってくるわね。」
「うん！哀ちゃんいってらっしゃい」
「工藤君。無茶は駄目よ。」
今日は哀と博士が二人とも外出中で、新一と快斗が二人でいることになっている。
「わぁってるよ。大丈夫だって。」
「貴方の大丈夫は信じられないは」
「大丈夫だって哀ちゃん俺がついてるんだから！心配するなって！」
「それもそうね。ならよろしくね黒羽君」
「まっかせなさい！哀ちゃん」
「じゃ。帰ってく来るのは、５時か６時ぐらいになりそうだけどよろしくね」
「はーい」
「きおつけろよ」
「えぇ。じゃぁね」

（パタン）

哀が出て行った後新一は快斗に言った

「お前母親どうするんだよ。俺の家に居候するなら、母親心配するだろう？」
「ん？あぁー母さん盲腸で入院してるよ。当分でてこないんじゃない？」
「えっぇ！じゃぁ父親は？」
「父さん？　死んだよ。」
「えっ？」

「まぁ俺がまだちっちゃい時にね」
「・・・ごめん」
「何であやまるの？」
「えっ　なんとなく・・・・」
「ふふん。新一かわいい～」
そういうと快斗は新一に抱きついた
「なにすんだ。バ快斗はなせ」
やっとのことで快斗から離れた新一であったが
「もう寝る！」
といいのこしてねてしまった。
「はずかしがりや何だ。新一は」

（バタン）
「ただいま。」
「おかえり哀ちゃん」
「あら、博士は？」
「今日とまりだっていってたけど。」
「あらそう。」
「それより哀ちゃんご飯できてるよ～」
「あら。ありがと。」
「どういたしまして。」

「・・・・・ん・・・・」

「あ！新一起きた？」
「く・・ろば？」
「こんばんわ新一」
「あぁ」

「ご飯できてるよ！食べる？」
「食う」
「はいは～いちょっとまってってね。」
（パタパタ）
そういって。快斗はキッチンに消えていった。

「お目覚め？工藤君」
「灰原？」
「えぇそうよ。」
「あのさ灰原？」
「何？」
「明日さぁ～。学校いっていいか？」
「ええいいわよ」
「馬路？やったー」
「まぁ。何もしないで、一日中寝てたらからだのほうもよくなるわよ。」

「新一～ご飯できたよぉ～。」
「おぉ～今行く」
「えっ新一起きていいの？」
「大丈夫だよ」
「それじゃ。哀ちゃん一緒に食べよう」
「そうね。」

（次の日）

「じゃいってくるな。」
「いってきま～す哀ちゃん」
「いってらっしゃい」
今日は新一の学校の登校日だ。久しぶりに学校に行く新一はそれはもうはりきっている。
「新一！俺こっちだから。」
「おう黒羽じゃぁ～な」
「うん。」
そういってるんるん気分で走っていく快斗を見送った新一は自分の学校のほうへ、歩き出した。
そうして少ししたとき、一人で学校に行くために歩いていく蘭が見えた。

（蘭！）

「蘭！」
「えっ？新一」
「なんだよ。幼馴染の顔もわすれたのかよ」
「ほんとに？ほんとに新一？」
「そうだよ。」
「新一～～～～～～～～」
「おっおい蘭」
蘭は少しなみだ目になっていった

「おっおい蘭っじゃないわよ。心配したんだからね！帰ってきたら、電話ぐらいよこしなさいよ。バカ！」
「おい！馬鹿はないだろバカは」
「ばかよぉ～ばかばか」

それから学校に行くまで、蘭のお叱りをうけて学校について、友達に歓迎されて、喜んでいるときに・・・・

『お知らせします。工藤新一君今すぐ職員室に来てください』

「なんだろ？」
「さぁ～新一早く行ってきなさいよ。」
「あぁ」

（ガラッ）
「失礼します」
「あっ工藤君」
「先生なんですか？呼び出したりして・・・・」
「それがね。」
「なんですか？」
「君、何日も無断欠席してただろ？」
「はぁ」
「それで勉強たまってるだろう？」
「はぁ」

「それで君には、補習を受けてもらおうと思う」
「えっ！補習ですか？」
「あぁ。そうなんだ」
「明日の放課後、居残りな」
「えぇ～」
「はいわかったら教室にもどって」
「はぁ。」

（ガラッ）

「補習か～まぁしょうがないかな？」

新一が、教室に入って蘭に話すと、なぜかその話が園子にもはってんし、しかもクラス中に発展してしまった。

友人達には
「がんばれよ。工藤！」
とか
「逃げるなよ工藤！」
とかいわれるしまつである

「じゃぁね新一」
「あぁまた明日な蘭！」
「うん！」

新一は蘭と別れ、自宅に戻ると。もう帰っていたのか快斗がいた

「新一～お帰り！」
「あぁただいま」
「聞いたよ新一明日補習だって？」
「何で知ってんだよ」
「あははは。俺に知らないことはないね。」
「バカか」
「新一。わかんないところがあったら聞いてね」
「ねぇ～よそんなところ」
「そっか。もうすぐでご飯できるからね」
「ご飯？」
「どうかした？新一？」
「あぁ～。俺んちにまともな食材あったかなって」
「あるわけないじゃん。かってきたんだよ。あるっていったら牛乳ぐらいだったよ」
「そうか」
両親が旅行に行ってから、新一の家の冷蔵庫は飾りといったほうがいいぐらい物が入っていなかった。
「そうかじゃないよ！毎日どうゆう生活してたの？」
「うぅ～ん不規則な生活」
「そんなんだからだめなんだよ」
「だめとはなんだだめとは」
「新一！」
「なんだよ」
「これから朝ごはんはきちんととってもらいます。」
「えぇ～メンドクサイ」
「めんどくさいじゃない！いつか倒れちゃうよ！」
「そうか？」
「そうだよ」
「とういうことでちゃんと朝ごはん食べてね！」

「あぁ」
「よし」
そいって。またキッチンの中に消えていく快斗だ。
（あいつ。ほんとに怪盗ＫＩＤ　なのか？）と思う新一である。

あいつほんとに怪盗ＫＩＤ　か？（後書き）

どうも！何かはなしが一向に進まない！と思うのは俺だけ？

何やってるんだよ新一・・・

それから補習も終わって快斗のいる生活になれて新一が黒羽のことを快斗と呼ぶようになってきたとき、いつの間にか快斗は工藤邸に居候のようにすごしていた。

「ねぇ新一」
「何だ快斗」
「・・・・・あのね」
「だからなんだ！」

「俺、明日からマジックの大会に行くの」
「・・・は？」
「何か寺井ちゃんがかってに決めちゃってさ・・・」
「いってこりゃいいじゃん」
「っえ？そんなあっさり・・・」
「じゃぁお前はどういってもらいたいんだ？」
「え！それは・・・」
「なんだ？？」

「快斗がいないと俺寂しいとか・・・」

（ゲシッ）
快斗に新一の黄金キックがさくれつした

「いたいよ～～新一」
「しるかっ」

「本当に大丈夫??ご飯もちゃんとたべる?」
「俺を子供あつかいしてるんじゃねぇ～よ」
「ん～～～」
「そんな顔するなって飯だってちゃんと食うし体に気をつけるし」
「本当!!!!」
「あぁ。でもその代わり!」
「何??」
「ゼッタイ優勝してくること!!」
「うん!約束する!!」
といって快斗をみおくって・・・・

「で、そんなこと言いながらあなたはこうなわけ・・・・」

「うるさい!灰原」
「おおぐちたたいてるくせに風邪なんかひくからよ」
「うるせーなー灰原」
「黒羽君が帰ってきたら何言われるかしら?」
「・・・・・」
「どうしたの?」
「なんでそこに快斗が入って来るんだよ」
「さぁなんででしょうね。蘭さんはどうなったの?」
「蘭か?う～ん、なんか前までは蘭の事しか考えてなかったけどな・・・」
「あら。やめたの?」

「なんだよやめたって・・・」
「別に・・・」
「というかうわさであいつ彼氏つくってるみたいだし・・・・・・」

「あらそうなの？」
「もうちょっとお前もなんかいうこともねぇーのかよ」
「あら貴方もあんまり気にしてないみたいじゃない」
「いや何かな・・・本当はうわさじゃなくて・・・・」
「本当のことなのね・・・・・」
「そうなんだよな」
「何で知ってるのそんなこと」
「蘭からきいたから・・・・」
そういって新一は少しさびしそうな顔をした
「あら本人からきいてるの・・・・」
「あぁそうなんだよ」
「でもあんまり落ち込んでないみたいね」

「あ？ん～なんだろうな不思議と悲しみはかんじないかな・・・・」

（クスッ）

「なんだよ灰原いきなりわらって」
「？。気づいてないの？鈍感ね。」
「何のことだよ・・・」
「まぁいいわ。はいこれ今日と明後日の分の薬」
「ありがと灰原」
「いいわよ別に」
「じゃな灰原」

「えぇ」
（バタンッ）

「まったく気づいてないなんてね黒羽君の気持ちに・・・まぁ貴方もそうだけどね・・・・
がんばりなさいよ黒羽君。」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「寺井ちゃん後どのくらい？」

「もうすぐつきますよ。」

快斗はマジック大会をすばらしい成績で優勝し新一の家に向かっている

「あ！電話してみよう。う～ん哀ちゃんにしようかな新一の様子知りたいし・・・」

携帯電話をかけた哀は2コールででた

「あ！哀ちゃん？」

『えぇそうよ。帰ってきたの？』

「うん。もちろん優勝したよ」
『そう。おめでとう』
「新一は？」
『工藤君？・・・・・』
哀がおしだまったので快斗がなにかかんづいたのか車の中でさけんでいた

「新一に何かあったの？！」

「坊っちゃま・・・・」
「あぁ大丈夫だよごめんビックリさせて・・・
　で哀ちゃんどうなの？」
『大丈夫よただ風邪ひいただけだから・・・』

その瞬間今度はさっきの絶叫より大きい声でさけんだ

「えぇ～～新一が風邪～～～～！！！！？？？？？」
『えぇそうなのよ。ま、ひごろの疲れかしら警察の捜査にかかわってるのに帰ってきたら何か調べ物してるみたいだから・・・・・でもご飯は食べてるわよ』

「調べ物？？」
『えぇ何調べてるかは知らないけど・・・・』
「わかった。できるだけ早く帰るから。」
『あ！それと。』
「何？？哀ちゃん」
『貴方のところの母親大丈夫なのか心配してたわよ工藤君』
「母さん？？母さんなら大丈夫だよ、今外国にいってるから」
『あら大変ね。まぁ早く帰ってきなさい黒羽君』
「うん」

（プチッ）

「坊ちゃま・・・新一様は・・・・・」

「うん風邪だって・・・寺井ちゃんできるだけ急いでくれる？」

「わかりました」

（新一・・・何やってんだよ・・・・・）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

何やってるんだよ新一・・・・（後書き）

はっ＜ｂｒ＞新一君が風邪！！！！＜ｂｒ＞てか風邪ぐらいですごくとまどってるよ快斗君＜ｂｒ＞これからどうなるんだよ＜ｂｒ＞あ！そうだ快斗君の母親は仕事の都合ってことになってますそこらへんよろしくお願いします・・・＜ｂｒ＞（どんな仕事してんだよ黒羽母・・・・・）

「い・・らな・い」

「新一～ちゃんと病気しないっていっちゃじゃん～～」
「コンッだれも・・・ケホッ・・・病気まではいってね～よ。」
「だからってソファーでねるか～ふつ～風邪ひいてんのに・・・・」
そう、快斗が急いでかえってきたらリビングのソファーでねているのをみつけた。そして急いでベットにねかしてやって、その間に灰原にきてもらって・・・・まぁとにかく大変だった。

「うる・・・さ・い」

「まったく・・・・・ただでさえ、体が弱くなってるんだから・・・・」

と、ゆう快斗言葉に風邪のせいか、新一はプチンッときてどなってしまった。

「うるさいっっっ!!!病人あつかいするんじゃねー。このバ快斗!!」
「新一が悪いんでしょ!!自分の体大事にしないんだから!」
「お前に何がわかるってんだっいきなりでてきてなれなれしくしやがって・・うざいんだよ!」

「何っ??心配してあげてのにそのいいぐさ!」
「おめーの心配なんていらねーんだよ!出てけ!」
「えっ?何で?なんで俺がでてかなくちゃいけないの??」
「あたりめーだら!ココは俺の家だお前の家じゃない!お前がいることさえうざかったんだよ!!」

さすがに、そこまでいわれると快斗もむかついて・・・。

「あぁーでてくよ!!でてきゃ～いいんだろ!」

「あぁそうだよ!」

(ばたんっっっ)

とうとうでってってしまった快斗・・・・・・・・

外＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「やべっ新一相手にどなっちまった・・・・どうしよう。」

と、悔やむ快斗である

「ちょっと、なにやってるの?黒羽君」

「えっ哀ちゃん?」

そこにたっていたのは隣の隣人だった。

一方新一は・・・・・

部屋＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ゲホッ・・ハッ・・ゴホッ・・・・・・・ハァ・・睡眠不足の一つ・・・や二つしねーと、やつらをしとめれ・・・ねーんだよ・・コホッ・・」

（ヤベッ・・目がかすんできやがった・・・・）

阿笠邸＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「でどうしたの？しけた顔して・・・・」

「どうしよう・・哀ちゃん新一にでてけっていわれちゃったよーー」

「は？？どうして」

「あのねーー・・・・・・・・」

そして今までのことを話した。

「小学生なみの喧嘩ね。」

「そんなこといわないでよ〜〜〜」

まるで犬のようにすがりつく黒羽快斗君。

すると、灰原が。

「ちょっとまって、貴方病人の工藤君一人にしてきたの？？」

「えぇまぁそうなりますけど・・・」
「何考えてるの馬鹿！工藤君風邪ひいてて、体もよわってるし発作もちよ！一人にしておいていいとおもってるの？？」
「えっ！あぁ！！！！ごめんなさい」
「今すぐ、工藤君の家いくわよ。そこにある医療器具とって！！」
「うっぅん！」
「早くしなさい！！」

工藤邸　夜＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「んっ・・・・・」

「起きた？工藤君。」

「はい・・は・・ら？」
「大丈夫よ。何かたべれる？」
「い・・らな・い」

だんだん覚醒してきた新一。
あのあと、新一は発作を起こしていた。
「ちょっとはたべなきゃだめよ。」
「いら・・・・」

そのつづきをいおうとしたとき・・・・・
「ちゃんとたべなきゃだめだよ新一・・・・・」
「く・・ろば？」
「黒羽君あとはよろしくね。」
「うん。哀ちゃん」

（パタン）

「くろば・・・・なんで・・ここにいる。でてけといったはずだ・・・ってなにすんだ！」

快斗は勢いよく新一に抱きついた。

「新一・・・・・心配した・・・・・」
「おいっはなせ！！」
「こめんっ新一・・・・・無神経なことといって・・・・」

抵抗してい新一だが、そのことばで静かになった。
快斗がかすかに震えているのがわかった・・・。

「黒羽？どうした」

「そばにいさせて。一人はいやなんだ・・・」

「黒羽？」
「ねぇ新一・・・・黒羽じゃなくて快斗って呼んで」
いつのまにか『黒羽』といってしまっていたの
だろうか・・

「・・・・快・・斗・・・・・」
きつくだきついてくるのが感触でわかった。

「もっとよんで」
「快斗」

よほどこわかったのだろう・・・・。

「快斗泣いてるのか」
「泣いてなんかいない・・・・」

うそだ。見てなくてもわかる。すごく震えてるし肩にちょっと濡れてるようなかんじがした。
それでも新一はなにもいわなかった・・・・・・・

「い・・らな・い」（後書き）

おひさひぶりです！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0635a/

Blue eyes

2010年10月10日05時48分発行